

こだわりアカデミー

《第328回》

聞き手 松村文衛

(アットホーム株式会社代表取締役)

◎対談記事はweb版「こだわりアカデミー」でもご覧になれます。

「こだわりアカデミー」で

検索

<http://athome-academy.jp/>

松尾 剛次 氏

Kenji Matsuo

(山形大学人文学部教授)

1954年長崎県生れ。77年東京大学文学部国史学科卒業、81年東京大学大学院人文科学研究科博士課程中退、94年同大学院人文科学研究科より博士(文学)授与。山形大学講師、助教授を経て現職。山形大学都市・地域学研究所所長兼務。日本宗教学会理事。日本仏教総合研究学会初代会長、東京大学COE特任教授、ニューヨーク州立大学オーバニー校東アジア研究学部客員教授なども務めた。現在は、官僧・通世僧研究を基点に、中世日本宗教史の見直しを行なっている。著書に『鎌倉新仏教の誕生』(講談社現代新書)、『仏教入門』(岩波書店)、『破戒と男色の仏教史』(平凡社)、『中世律宗と死の文化』(吉川弘文館)、『葬式仏教の誕生』(平凡社新書)など多数。

日本の仏教は時代とともにダイナミックに変ってきました。「仏教Ⅱ葬式」のイメージも変っていくと思います。

「奇跡」の話がきっかけで、仏教への関心が高まった

——先生は日本仏教史の第一人者で、特に鎌倉仏教が専門だと伺っております。

私達が学校で習った当時の仏教といえば、法然や親鸞の浄土信仰や、禅宗、日蓮宗などが思い浮かびますが、そもそも先生がこうした研究を始めようと思われたきっかけは？

松尾 私は大学時代、主に中世史を専攻していたのですが、4年生の時、ゼミの教授にあるテーマで卒論を書かないかと勧められ、それで手にした資料を読んで仏教に関心を持ったのです。

——それは、どのような内容だったのですか？

か？

松尾 戒律を重んじた律宗の僧、「忍性」が起こした奇跡の話です。

当時の仏教は、「穢れ」を忌み嫌っており、特に死体に触れたり、葬送、墓の発掘などに携わった人間は、30日間、神事や参内などを慎む程でした。しかし忍性は、非常に穢れた存在と考えられていたハンセン病など重病患者の救済活動を積極的に行ない、多くの患者を治癒するという奇跡を起こし、「生き仏」と崇められたのです。

——何より避けるべき「穢れ」を避けることなく、逆に、慈悲深く、救済に努めたわけですね。あえてタブーに立ち向かうというのは、とても勇気が必要なことだったでしょう。



(写真上) 額安寺(奈良県大和郡山南市)の巨大五輪塔、総高は2.95m。律宗の僧が建立したもので、全国に60基以上ある。(写真下) 五輪塔の下から出てきた忍性の骨蔵器。五輪塔の地下、土台石および江戸時代に置かれた地覆石の下にある、1辺1.1mのほぼ正方形に近い深さ0.9mの穴に納められていた(写真提供:松尾剛次氏)

人間誰しもが

「送りたい」「送られたい」と願う

——ところで、先生は多数の著書を出版されていますが、最近では『葬式仏教の誕生』が話題となりました。とても興味深く拝読させていただきましたが、なぜ「葬式仏教」をテーマにしようと思われたのですか？

松尾 現代の日本の仏教者、特に僧侶は、

「清浄の戒は汚染なし」という信念でした。それは、厳しい戒律を守っていれば、社会的な救済活動はもとより、穢れからも守られるという論理だったのです。事実、忍性は20年間で5万7000人を介護し、そのうちの4万6000人の命を救ったという奇跡の記録があります。しかし実際には、そうした人々の多くは重病などではなく、栄養失調や環境の悪さから皮膚病などに罹っていたに過ぎなかったのかもしれない。



——十分な食事を与え、薬湯風呂に入れるなどによって治癒できたのは、今考えてみると当り前のことですが、当時の人々には「奇跡」と感じられたのでしょうか。

葬式と法事を理由に高い戒名料や葬儀代を取り、本来するべき人々の救済願望に比べると役割を果たしていないのではないだろうか、という意味合いを込めて「葬式仏教」という言葉を使っています。

その一方で、葬儀というのは「送りたい」「送られたい」と願う人間の根源的な欲求に応える重要な儀式だと考えています。そこで、葬

式仏教成立の歴史を振り返りながら今一度、僧侶のあり方や葬儀の意義を明らかにしたいと思ったのです。

——確かに、人間は誰しも、死んだ後「あの世へ往けたら」と思っています。だから、儀式を行なうことで、送る者、そして往く者の気持ち安らくなる。それを実現するための神聖なものが葬儀なんじゃないか。

では、「穢れ」を忌み嫌っていた僧が葬式に従事するようになったのは、こういった経緯だったのでしょうか。

松尾 古代の僧は、基本的には「官僧」、いわゆる官僚僧で、鎮護国家の祈禱に従事する

のを第一義とし、穢れの忌避が義務付けられていました。しかし鎌倉時代、そうした官僧

世界を離脱した「遁世僧」が登場し、彼らにより新しい仏教が開かれるとともに、それまでの戒律に縛られず、葬式を行なうようになり、急速に庶民と結び付いていったのです。

——僧侶が葬式に携わることは、歴史的に革命的な出来事だったんですね。とはいえ、先程も申し上げました通り、人には葬儀に対する思い入れがありますから、葬式と、極楽浄土や成仏などを説く仏教とが結び付いたのは、自然なことのように思います。

松尾 そうですね。

また、忍性ら律僧たちは「斎戒衆」という組織を作り、彼らに葬送や重病患者救済など、穢れに関わる行事の実務を専門的に行なわせました。いわば、葬儀の支援者（現在でいう葬儀社）といったところでしょうか。

その後、遁世僧らの手によって、死者の極楽往生と成仏を具現化するために「墓碑」や「五輪塔」が建立され、そこへ詣でる習慣が始まります。

江戸時代には、キリシタンではないことを調査する宗門改めが徹底して行なわれ、寺院にそれを証明させる寺請制度ができました。日本人は原則として仏教徒とされ、それぞれが寺の固定的な檀家に置かれる檀家制度が確立、そのようにして、葬式仏教が定着していったのです。

暮らしに根差した「生活仏教」へ

——古今東西を問わず、人々は昔から何らかの形で葬送や葬儀を行なってきました。しかし最近

は、「寺での葬式はいらない」といった風潮が見られるのも事実です。今後、日本仏教はどうあるべきだとお考えですか？

松尾 人々の暮らしに根差した「生活仏教」へ変っていかなくてはならないと考えています。私がアメリカの大学で教鞭をとっていた頃、困った時には

まず教会へ行くといわれました。実際に行ってみると、信者であるなしにかかわらず、住まいや地域の情報について事細かに教えてくれ、とても助かったことを覚えてい

ます。つまり、アメリカでは教会が地域の情報ターミナルであり、救済センターの役割を果たしていたということですね。

松尾 そうなんです。

実は、日本には約7万6000もの寺院があります。その数は、コンビニエンスストアよりも多いんですよ。コンビニがわれわれの需要に応え、生活の役に立っているように、地域に数多く存在する寺院も、アメリカの教会のような、地域に根差した「生活相談所」になるべきではないかと思うのです。もしそれが実現すれば、少なくとも孤独死や無縁死はなくなっていくのではないのでしょうか。

——そういえば、東日本大震災の被災者の中にも、きちんとした葬儀を望む人が多かったと聞きました。それに比べ、たくさん僧侶がボランティアに駆け付けたのだとか。

松尾 はい。大地震や津波によって寺や墓がなくなり、葬式が間に合わないため仮埋葬したのですが、やはりもったいなく感じました。多

律宗の僧「忍性」。87歳で死去した忍性は、鎌倉極楽寺の西畔で火葬された後、その遺言によって、遺骨は三分割され、極楽寺と竹林寺、額安寺に葬られた写真提供：松尾剛次氏



かつての寺院は、地域民衆の救済センターであり、中心的存在としてさまざまな活動に携わっていました。もちろん、葬儀や法事も大切なことですが、今を悩みながら生きている人々の救済願望に応えるという役割も、もっともとあっていいのではないかと、そういう努力も必要ではないかと思っています。

——6世紀、中国から渡来した仏教は、時代に適応しながらどんどん変化を遂げています。これからも変っていくと思いますが、地域の人々から頼られる存在として変っていくといいですね。

本日はありがとうございました。

【こだわりアカデミー】書籍プレゼント

今月号【こだわりアカデミー】にご登場の松尾剛次氏の著書『葬式仏教の誕生』（平凡社新書）を、抽選で5名の方にプレゼントいたします。

ご希望の方は、①氏名、②貴社名、③住所（送り先）、④電話番号、⑤書籍名、⑥本紙の簡単な感想をご記入の上、下記までご応募ください。



■宛先：「こだわりアカデミー」書籍プレゼント係

FAX：03-3580-7610

Eメール：talk@athome.co.jp

※2012年2月18日（土）到着分まで有効とし、当選者は、本紙12年4月号にて、発表いたします。

応募者の個人情報は、抽選・賞品の発送のみに利用します。